

神奈川県大和市方言



神奈川県方言区画図

【**神奈川県の方言区画**】神奈川県は旧国名でいうと相模国全域と武蔵国の一部を含む。神奈川県内の方言は、全県的に極めてよく類似していると言われる。その中で、方言区画を設定するとすれば、まず、県内西北部にある丹沢山塊を隔てて「北部方言」と「南部方言」に大別することができる。そして、南部方言は主に漁労関係者とそのコミュニティのことばである「相模湾沿岸方言」と、「内陸方言」とに分かれる。また、県東南部にある三浦半島は文法、音韻の面で県内方言の古い姿や当地独自の特徴を色濃く持っているため、「三浦半島方言」として区画される。

【**大和市方言について**】大和市は神奈川県ほぼ中央に位置する内陸の市で、市域の北部は相模原市と東京都町田市、東部は横浜市（瀬谷区、泉区）、南部は藤沢市、西部は座間市、海老名市、綾瀬市と接している。県内の方言区画では、「南部方言」の下位区分である「内陸方言」に属する。地理的には相模野台地に位置し、丘陵起伏がほとんどない。発音上の特徴として以下のものがある（1）動詞に受身の「レル・ラレル」が後続するとき、例えば「トラエタ」（取られた）もしくは「トライタ」と [r] が脱落し、イ・エと発音されることがある。特に「タベライチャッタ」（食べられてしまった）のように完了相の「～ちゃった」が後続する形式で観察される。規則的ではないが「アレ・コレ・ソレ」の [r] も脱落して「ア

イガ」（あれが）、「ソイデ」（それで）などとなる。

（2）語中・語末、助詞の「が」のガ行音は規則的に鼻濁音で発音される。（3）ケーコ [ke:ko]（蚕）、オセー [ose:]（遅い）、イビー [ibi:]（いぶい：煙たい）など一部の語で連母音の融合が観察される。アウはアー [a:]、アイ・アエ・イエ・エイ・オイ・オエはエー [e:] となる。語的な例外として蛙はキヤール [kia:ru:]、青いはアウェー [awe:] である。ウイはイー [i:] となるが形容詞の語末の一部に「ウセー」（薄い）や「ヒケー」（低い）のように [e:] となる例がみられた。また、「ココー、コケー」（ココワ、ココエ：ここは、ここへ）や「ウチャー」（ウチワ：家は）など、名詞等に付属語が後続した場合にも、融合が生じる。なお、融合は盛んではあるが義務的ではない。（4）無声の子音に挟まれた狭い母音 /i, u/ は規則的に無声化する。無声化に伴うアクセントの下がり目の移動は規則的ではなく、[φw]「kw」（吹く）などのように無声化しながら下がり目の位置を保つ発音も認められた。（5）「カー」（川・革）、「マース」（回す）のように [a] に挟まれた [w] は弱化もしくは脱落し、前後の母音が連続して長音化することが多い。

【**表記について**】文献から引用した用例は、明らかな誤りがある場合を除き原典の表記に従う。共通語訳は私に加筆したり改めたりした部分がある。調査によって得た用例はカタカナで示す。語中のガ行音については規則的に生じるため特別な表記はせず、破裂音と同様「ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ」とする。

【**調査概要**】市内で生育した男性話者（1933 年生まれ、1944 年生まれ）を対象にした面接調査による。また、1904 年～1918 年生まれの話者の自然談話文字化資料も参照している。

神奈川県大和市方言の活用表

《動詞》

活用型 動詞		多段型 書く	一段型 見る	来る	する
活用形					
終 止 類	断定非過去	カク	ミル	クル	スル シル
	断定過去	カイタ	ミタ	キタ	シタ
	命令	カケ カキナ	ミロ ミナ	コー コイ キナ	シロ シナ
	禁止	カクナ	ミンナ ミルナ	クンナ クルナ	シンナ スンナ スルナ
	意志	カクベ (一) カコー	ミンベ (一) ミベー ミヨー	クンベ (一) コベー コヨー	シンベ (一) スンベ (一) シベー スベー シヨー
	推量	カクダンベ (一) カクダベ (一) カクベ (一) カクダロ (一) カクンジャネーカ カクンジャン (カ)	ミンダンベ (一) ミンダベ (一) ミンベ (一) ミンダロ (一) ミンジャネーカ ミンジャン (カ)	クンダンベ (一) クンダベ (一) クンベ (一) クンダロ (一) クンジャネーカ クンジャン (カ)	シンダンベ (一) スندانベ (一) シンダベ (一) スنداベ (一) シンベ (一) スンベ (一) シンダロ (一) スنداロ (一) シンジャネーカ スンジャネーカ シンジャン (カ) スンジャン (カ)
接 続 類	連体非過去	カク	ミル	クル	スル シル
	連体過去	カイタ	ミタ	キタ	シタ
	中止	カイテ	ミテ	キテ	シテ
	仮定	カキヤ (一) カケバ	ミリヤ (一) ミレバ	クリヤ (一) クレバ	シリヤ (一) スリヤ (一) シレバ スレバ
派 生 類	否定	カカネー カカナイ	ミネー ミナイ	コネー コナイ	シネー シナイ
	丁寧	△カキマス	△ミマス	△キマス	△シマス
	使役	カカス カカセル	ミサス ミサセル	コサス コサセル	サス サセル
	受身	カカレル	ミラレル	コラレル	サレル
	可能	カケル	ミレル	コレル	《デキル》
	尊敬	カカレル	ミラレル	コラレル	サレル

				《イラッシャル》	
継続	カイテル	ミテル	キテル	シテル	
希望	カキテー カキタイ	ミテー ミタイ	キテー キタイ	シテー シタイ	
のだ	カクンダ カクダ カクノ	ミルンダ ミルダ ミンダ ミルノ ミンノ	クルンダ クルダ クンダ クルノ クンノ	シルンダ スルンダ シルダ スルダ シンダ スンダ スルノ スンノ	

多段型動詞の基幹音便形

語幹末子音	語例	活用形例(過去形)	作り方
k	書く kak·u	カイ-タ	kをiにする。「行く」ik·u(またはig·u)はkまたはgをQ(促音)にし「イッ-タ」。「歩く」aruk·uはkをQ(促音)にし、「アルッ-タ」となることがある。
g	嗅ぐ kag·u	カイ-ダ	gをiにする。基本的に-タが-ダになるが、-タが保たれる場合もある。
s	出す das·u	ダシ-タ	音便形をとらず、基幹イ段形を用いる。
t/c	立つ tac·u	タッ-タ	t/cをQ(促音)にする。
n	死ぬ sin·u	シン-ダ	nをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
b	飛ぶ tob·u	トン-ダ	bをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
m	飲む nom·u	ノン-ダ	mをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
r	切る kir·u	キッ-タ	rをQ(促音)にする。
w/ø	買う ka(w)·u	カッ-タ	wをQ(促音)にする。

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		赤い	静か(だ)	学生 [ガクセー] (だ)
終 止 類	断定非過去	アケー アカイ	シズカダ	学生ダ
	断定過去	アカカッタ	シズカダッタ	学生ダッタ
	推量	アカカンベ (一) アケーダンベ (一) アカイベ (一) アケーベ (一) アカイダロ (一) アケーダロ (一) アケーンジャンネーカ アカインジャン (カ) アケーンジャン (カ)	シズカダンベ (一) シズカダベ (一) シズカダロ (一) シズカジャンネーカ シズカナンジャンネーカ シズカジャン (カ)	学生ダンベ (一) 学生ダベ (一) 学生ダロ (一) 学生ジャンネーカ 学生ナンジャンネーカ 学生ジャン (カ)
接 続 類	連体非過去	アケー アカイ	シズカナ	学生ノ
	連体過去	アカカッタ	シズカダッタ	学生ダッタ
	中止	アカクテ	シズカデ	学生デ

		アカクッテ		
	假定	アカキャ アカケリヤ アカケレバ	シズカナラ シズカダッタラ	学生ナラ 学生ダッタラ
派 生 類	否定	アカクネー	シズカジャーネー	学生ジャーネー
	なる	アカクナル	シズカニナル シズカンナル	学生ニナル 学生ンナル
	丁寧	△アカイデス	△シズカデス	△学生デス
	のだ	アケーダ アケーンダ	シズカナンダ	学生ナンダ

1. 動詞の活用の特徴

(1) 活用型と語類の対応

規則的な活用型として基幹多段型(以下「多段型」)と基幹一段型(以下「一段型」)がある。おおよそ、多段型にはa類(「書く」・「^お居る」・「死ぬ」類)動詞、一段型にはb類(「見る」・「起きる」・「開ける」類)動詞が所属する。

多段型の基幹にはア・イ・ウ・エ・オ段の5形、および、音便形がある。融合によってア段拗音となることもある。「カク」の場合、カカネー(kak·a-neR)、カキマス(kak·i-masu)、カク(kak·u)、カケ(kak·e)、カコー(kak·o-R)、カイト(kai-ta)、カキヤー(kak-ja-R)など。また、語幹末子音には、k(カ行)、g(ガ行)、s(サ行)、t(タ行)、n(ナ行)、b(バ行)、m(マ行)r(ラ行)、w(ワ行)がある。多段型動詞「行く」の語幹の末尾子音kはしばしば有声破裂音に変化して「イグ」(ig·u)となる。

一段型には、ミル(mi-ru)、オキル(oki-ru)など、基幹がイ段の動詞と、ネル(ne-ru)、アケル(ake-ru)など基幹がエ段の動詞がある。一段型の動詞は、「ミル」を例にすると、断定非過去形ミル(mi-ru)、假定形ミレバ(mi-reba)、ミリヤー(mi-rja-R)、受身形・尊敬形ミラレル(mi-rareru)、可能形ミレル(mi-ru)において、rで始まる接辞が付き、かつ、多段型のr語幹動詞に対応した形となる。

不規則な活用をする動詞に「クル」(来る)と「スル」(為る)がある。ともに一段型に近い活用をするが、「クル」は、キタ(k·i-ta)、クル(k·u-ru)、コー(k·o-R)などのように、基幹が「キ」、「ク」、「コ」の3段に、「スル」はサレル(s·a-ru)、シタ(s·i-ta)、スル(s·u-ru)などのように、基幹が「サ」、「シ」、

「ス」の3段にわたる。なお、「する」は、断定非過去形スル(s·u-ru)とシル(s·i-ru)、禁止形スナ(s·u-Nna)とシンナ(s·i-Nna)、意志形スンバー(s·u-N=beR)とシンバー(s·i-N=beR)などのように、基幹が「ス」の活用形にはすべて併用形として基幹が「シ」の形式がある。共通語の「サ」、「シ」、「ス」の3段と比較すると、基幹がイ段の一段型に近いといえる。

(2) 各活用形の特徴

〈断定非過去形〉

断定非過去形は連体非過去形と同形である。多段型動詞はウ段型カク(kak·u)など。一段型動詞は基幹に「ル」が後続したミル(mi-ru)など、「来る」は基幹ウ段形に「ル」が後続したクル(k·u-ru)である。「する」はウ段形に「ル」が後続したスル(s·u-ru)と、イ段型に「ル」が後続したシル(s·i-ru)であり、イ段形のシルの方が当該地域の方言の特色を表している。

・ヒニ アタルヨーニ シテ ソシテ メシクー。(稲が)日に当たるようにしてそして飯を食べる。(方言1)

・ダーカラ ダイガイ チクチクシル。(だから)大概ちくちくする。(方言1)

断定非過去形・連体非過去形ともに、末尾拍がルの多段型(「走る」など)、一段型、「クル」「スル」では、カ・ガ・サ・ザ・タ・ダ・ナ・ハ・バ・マ・ヤ・ワ行で始まる諸形式が続くときは撥音化しやすく、促音化はしにくい。

・サガンノガ ナナスンカ ハッスングライネ
(下がるのが7寸か8寸ぐらいね)(方言1)

- ・ソーシント マー エート (そうすると まあ ええと) (方言1)

〈断定過去形〉

断定過去形は連体過去形と同形である。多段型動詞は基幹音便形(「カク」の場合 kai)に、一段型動詞は基幹(「ミル」の場合 mi)に、「来る」「する」はそれぞれ「キ」(k·i)「シ」(s·i)に、「タ」が後続する。すなわち、カイ-タ(kai-ta)、ミ-タ(mi-ta)、キ-タ(k·i-ta)、シ-タ(s·i-ta)である。「歩く」の断定過去形はアルツタ(aruQ-ta)の形をとることがある。

多段型動詞で語幹末子音が g、n、b、m の場合、「タ」ではなく「ダ」が後続する。末子音が g のときに、「タ」が後続することもあるがそれほど頻繁ではない。

- ・ウミデ オヨイタ (海で泳いだ) (OM1)

〈命令形〉

命令形は、多段型動詞ではカケ(kak·e)など基幹エ段形、一段型動詞と「する」ではミロ(mi-ro)、シロ(s·i-ro)など、基幹に「ロ」が後続する。「来る」は、共通語と同じオ段型に「イ」が後続する「コイ(k·o-i)」も使用するが、くだけた・打ち解けた場面ではオ段形に長音が続くコー(k·o-R)または助詞「ヨ」を伴うコーヨ(k·o-R=jo)が用いられる。「クレル」は他の活用形は一段型動詞と同じだが、命令形は「クレロ」ではなく、基幹「クレ」である。また、基幹の末尾拍「レ」が撥音化し、「ナ」が後続するクンナ(k·uN=na)や、基幹が融合したエ段長音形に「ナ」が続くケーナ(k·eR=na)がある。

このほか、やや丁寧な命令形として多段型動詞と「する」「くる」は基幹イ段形に、一段型動詞は基幹に「ナ」が後続するカキナ(kak·i-na)、ミナ(mi-na)「キナ(k·i-na)」「シナ(s·i-na)」がある。

- ・デンプンオ タクサン ツクレト ユー コトデ (澱粉をたくさん作れということ) (方言1)
- ・オマー アソビ イッテコー (おまえ遊び行ってこい) (方言2)

〈禁止形〉

断定非過去形に「ナ」が後続する。断定非過去形の末尾が「ル」の時は多くの場合が撥音化する。「する」の禁止形はスンナ(s·u-N=na)とシンナ(s·in-N=na)の両形がある。

- ・ソナ トコデ アスブナ (そんなところで遊ぶな) (OM2)
- ・イタズラ シンナ (悪戯をするな) (OM2)

〈意志形〉

意志形は共通語と同じ、多段型動詞は基幹オ段長音形、一段型動詞は基幹、「する」はイ段形、「来る」はオ段形に「ヨー」が後続する。カコー(kak·oR)、ミヨー(mi-joR)、シヨー(s·i-joR)、コヨー(k·o-joR)。くだけた・打ち解けた場面では「ベー」が後続する形式が使用される。「ベー」が接続する形式は2種類ある。すなわち、断定非過去形(なお、末尾が「ル」の場合原則的に撥音化する)に「ベー」が後続するカクベー(kak·u=beR)、ミンベー(mi-N=beR)、クンベー(k·u-N=beR)、スンベー(s·u-N=beR)・シンベー(s·i-N=beR)と、一段型動詞の基幹と「する」の基幹ウ段形・イ段形、「来る」のオ段形に「ベー」が後続するミベー(mi-beR)、スベー(s·u-beR)・シベー(s·i-beR)、コベー(k·o-beR)である。多段型動詞は後者の形をとらない。特に断定非過去形に「ベー」が後続する際、語末の長音は義務的ではない。

- ・マダ オワンナイカラ テツダイニ イッテヤンベー (まだ終わらないから手伝いにいつてやろう) (方言1)
- ・カルベート オモート (刈ろうと思うと) (方言1)

〈推量形〉

共通語と同じく、断定非過去形(なお、末尾が「ル」の場合原則的に撥音化する)に「ダロー」が後続する。カクダロー(kak·u=daroR)、ミンダロー(mi-N-daroR)、クンダロー(k·u-N=daroR)、スنداロー(s·u-N=daroR)・シンダロー(s·i-N=daroR)。単独で終始する場合はカクダロ(kak·u=daro)のように語末の長音が脱落した形がある。くだけた・打ち解けた場面では①「ダンベー」②「ダベー」③「ベー」が接続する形式がある。いずれも断定非過去形に接続し、末尾が「ル」の場合原則的に撥音化する。「する」はウ段型に「ル」が後続したスルとイ段形に「ル」が後続した「シル」の両方に各形式が続く。以下の通り。①カクダンベー(kak·u=daNbeR)、ミンダンベー(mi-N=daNbeR)、クンダンベー(k·u-N=daNbeR)、スندانベー(s·u-N=daNbeR)・シンダンベー(s·i-N=daNbeR)、②カクダベー(kak·u=dabeR)、ミンダ

べー (mi-N=dabeR)、クンダべー (k·u-N=dabeR)、スنداべー (s·u-N=dabeR)・シンダべー (s·i-N=dabeR)、③カクべー (kak·u=beR)、ミンべー (mi-N=beR)、クンべー (k·u-N=beR)、スンべー (s·u-N=beR)・シンべー (s·i-N=beR)。なお、語末の長音は義務的ではない。

・カタイ トコロガ ヒドク エンダロー。(かたいところがひどくえむ (=割れ目ができてしまう) でしょう) (方言1)

・ズイーブン ゴビシベ (随分ゴビ (=ごみ) が出るでしょう) (方言1)

過去の推量を表す場合のうち、「べー」が付く形は断定過去形に「ダンべー」、「べー」、「ンべー」が接続した形がある。カイトダンべー (kai-ta=daNbeR)、カイトべー (kai-ta=beR)、カイトンべー (kai-ta-NbeR)。その中で最も用いられるのは「ンべー」が後続する形式である。

・ヘー フロ ヘーッタンべ (もう風呂に入ったろう) (OM1)

いずれの形にも確認要求の用法がある。上昇イントネーションを伴う。

・ナガイト ミズ スイアゲチャウベ (長いと水、吸い上げてしまうでしょう) (方言1)

このほかに、カクンジャネーカ (kak·u=NzjaneRka) のように断定非過去形に「ンジャネーカ」もしくは「ンジャネーノ」が後続する形式がある。この場合、イントネーションは他の形式と逆で、推量用法が上昇調、確認要求用法が下降調である。

また、断定非過去形、断定過去形に「ジャン(カ)」が後続する形式がある。主に確認要求の意味で用いられる。また、「ンジャン(カ)」が後続し、上昇イントネーションで非常に確信の低い推量の意味(「ンジャンネーノ」に相当する)で用いられることがある。

・ハチガツニ ナルト ケーコガ デチマウジヤンカ (8月になると蚕が出てしまうじゃないか) (方言1)

・キョーモ イルンジャンカ (今日もいるのだろう) (作例)

〈連体非過去形〉

連体非過去形は、断定非過去形と同形である。断定非過去形の項で示した通り、末尾拍がルの多段型(「走る」など)、一段型、「クル」「スル」では、カ・

ガ・サ・ザ・タ・ダ・ナ・ハ・バ・マ・ヤ・ワ行で始まる諸形式が続くときは撥音化しやすく、促音化はしにくい。

・コンダ ムギオ カルニヨ コマツチャッタヨ (今度は麦を刈るのに困っちゃったよ。)

(方言1)

・タネバッカリ ツム ヤツノ ホーガ スクナクテ スムヨナ。(種ばかり摘む方が少なくて済むよな) (方言1)

・ソノ キメンノワ ソノ クワノ メダチノ ヨースナンデスヨネ。(その、決めるのはその桑の芽立ちの様子なんですよ) (方言1)

〈連体過去形〉

連体過去形は、断定過去形と同形である。

・タオレタ ムギナンカ ナクヨーダヨ (倒れた麦なんか泣くくらい(ひどい)だよ) (方言1)

・タマオ クルンダ ヌノノ サキオ コーヒタシテアッテ (球をくるんだ布の先をこう浸してあって) (方言1)

〈中止形〉

多段型動詞は基幹音便形(「カク」の場合 kai)に、一段型動詞は基幹(「ミル」の場合 mi)に、「来る」「する」はそれぞれ基幹イ段形「キ」(k·i)「シ」(s·i)に、「テ」が後続する。すなわち、カイト (kai-te)、ミテ (mi-te)、キテ (k·i-te)、シテ (s·i-te) である。

多段型動詞で末尾子音が g, n, b, m の場合、「テ」のかわりに「デ」が後続する。ただし、末尾子音が g のときは、「デ」のかわりに「テ」が後続することもある。

・イチバンジロ キッテ シバラク シットニバンジロ キッテ (1番代切ってしばらくすると2番代切って) (方言1)

・タイヒノ ナカニ アーセテ ツムヤツトヨ。(堆肥の中に合わせて摘むのと) (方言2)

・カーオ オヨイテ キタ (川を泳いで来た) (作例)

〈仮定形〉

共通語と同じく、多段型動詞は基幹エ段形に「バ」が、一段型動詞は基幹に、「来る」は基幹ウ段形、「する」は基幹ウ段形もしくはイ段形に「レバ」が後続する。カケバ (kak·e-ba)、ミレバ (mi-reba)、クレバ

(k·u-reba)、スレバ (s·u-reba)・シレバ (s·i-reba)。
また、その縮約形として、ア段拗音を含むカキヤー
(kak·jaR)、ミリヤー (mi-rjaR)、クリヤー (k·u-rjaR)、
スリヤー (s·u-rjaR)・シリヤー (s·i-rjaR) がある。
語末の長音は義務的ではない。

- ・アサメシ タベリヤノー イッチャウ (朝飯
食べたら行ってしまう) (方言1)
- ・カゼ ヨク トーシヤ イーンダネー。(風
をよく通せばいいんだね。) (方言2)

〈否定形〉

多段型動詞の基幹ア段形、一段型動詞の基幹、「来る」のオ段形、「する」のイ段形に「ない」の連母音が融合した「ネー」が後続する。カカネー (kak·a-neR)、ミネー (mi-neR)、コネー (k·o-neR)、シネー (s·i-neR)。カカナイ (kak·a-nai) のように非融合形の「ナイ」が後続する形もある。多段型動詞で基幹末の拍が「ラ」の場合トンネー(取ネー、toN-neR)のように撥音化することがある。この形は形容詞に準じた活用をする。

- ・アソコジャー マダ オワンネーナ シンセ
キジャ マダ オワンナイ (あそこではまだ
終わらないね。親戚ではまだ終わらない) (方
言1)
- ・イマ アマリ カミナリッテノワ ナンネー
(いまあまり雷というのは鳴らないね) (方
言1)
- ・トチューデ ショクリョーガ タンクナッ
チャウンデネ。(途中で食料が足りなくなっ
てしまうのでね) (方言1)

〈丁寧形〉

改まった・かしこまった場面で使用されるが、日常の会話では好まれない。形式としては多段型動詞の基幹イ段形、一段型動詞の基幹、「来る」「する」のイ段形に「マス」が後続する。カキマス (kak·i-masu)、ミマス (mi-masu)、キマス (k·i-masu)、シマス (s·i-masu)。多くの場合カキマス=ヨやカキマス=ネのように終助詞を伴う。丁寧形自体は、断定非過去形「マス」、断定過去形「マシタ」、否定形「マセン」のような3段の活用をする。断定過去形は共通語と同じ「マシタ」のほかに「タデス」の形をとることがある。

- ・エー アリマスネ。(ええ、ありますね) (方

言1)

- ・ナイリクブノ ホーニ ナリマスカラ (内陸部の方になりますから) (方言1)
- ・フエフキッテ イッタデスネー (笛吹って言いましたね) (方言1)

〈使役形〉

多段型動詞、「する」の基幹ア段形に「ス」が、一段型動詞の基幹と「来る」オ段型に「サス」が後続する。カカス (kak·a-su)、ミサス (mi-sasu)、コサス (k·o-sasu)、サス (s·a-su)。多段型動詞に準じた活用をする。ただし、「ス」「サス」は命令形、「バ」「レバ」が後続する仮定形、否定形では用いられない。

また、多段型動詞と「する」は基幹ア段形に「セル」が、一段型動詞は基幹に、「来る」はオ段形に「サセル」が後続する。カカセル (kak·a-seru)、ミサセル (mi-saseru)、コサセル (k·o-saseru)、サセル (s·a-seru)。この形は一段型動詞に準じた活用をする。

- ・シンメオ デタバカリノー タバサシテルウ
チニ ((蚕に桑の) 新芽が出たばかりのを食べ
させているうちに) (方言1)
- ・カンゼンニネムラシテヤツテネ ((蚕を) 完全
に眠らせてやってね) (方言1)

〈受身形〉

多段型動詞と「する」の基幹ア段形に「レル」が、一段型動詞の基幹と「来る」のオ段形に「ラレル」後続する。一段型動詞に準じた活用をする。カカレル (kak·a-reru)、ミラレル (mi-rareru)、コラレル (k·o-rareru)、サレル (s·a-reru)。

「レル」「ラレル」の「レ」が「エ」になった「エル」「ラエル」や、「イ」になった、「イル」「ライル」もある。接続は「レル」「ラレル」と同じだが、断定非過去形ではあまり用いられず、断定過去形、中止形、完了の「チャッタ」が後続する形式などで使用される。カカイチャッタ (kak·a-i=cjaQta)、ミライチャッタ (mi-rai=cjaQta)、コライチャッタ (k·o-rai=cjaQta)。

- ・レベラレタラ タマンナイヨ (煽られたらた
まらないよ) (方言1)
- ・イッテコーナンテ ユワイテ (行ってこいな
んて言われて) (方言2)

〈可能形〉

多段型動詞は基幹エ段形に「ル」が後続する。カ

ケル (kak·e-ru)。一段型動詞は基幹に、「来る」は基幹オ段形に「レル」が後続する。ミレル (mi-rueru)、コレル (k·o-rueru)。一段型動詞に準じた活用をする。

「する」は代替形「デキル」を用いる。一段型動詞の基幹と「来る」の基幹オ段形に「ラレル」が後続する形もあるが、多く「レル」の形が用いられる。

・テキトーニ オケル トコロニ オイテ (方言1)

・タノコトー マーシテオカナキャ デキナイ
(他のことを回しておかないとできない)
(方言1)

〈尊敬形〉

丁寧形と同じく、改まった・かしこまった場面で使用されるが、日常の会話では好まれない。多段型動詞と「する」は基幹ア段形に「レル」が後続する。カカレル (kak·a-rueru)、サレル (s·a-rueru)。一段型動詞の基幹と「来る」の基幹オ段形には「ラレル」が後続する。ミラレル (mi-rareru)、コラレル (k·o-rareru)。受身形と同じく、「レル」「ラレル」の「レ」が「エ」になった「エル」「ラエル」や、「イ」になった、「イル」「ライル」の形もある。

・オンドー ドンドン アゲルヨーニ ヤラレル ヨーデス (温度をどんどん上げるようにやられるようです) (方言1)

・ユーガタツカラ ヒナンサレル ヒトガ ミエタヨーダケンド。(夕方から避難される人がいたようだけれど。) (方言2)

・ソコカラ コライタンダケンド。(そこ(お寺)から来られたのだけれど。) (方言2)

〈継続形〉

多段型動詞は基幹音便形(カクの場合 kai)に、一段型動詞は基幹に、「来る」「する」はそれぞれ基幹イ段形「キ」「シ」に、「テル」が後続する。「テル」は「テイル」の縮約形である。カイトル (kai-teru)、ミテル (mi-teru)、キテル (k·i-teru)、シテル (s·i-teru)。

・マダ シモガ フツテル コロニ (まだ霜が降っている頃に) (方言1)

・オナジコト ヤッテンカラ (同じことをやってくるから) (方言1)

〈希望形〉

多段型動詞の基幹イ段形、一段型動詞の基幹、「来る」「する」の基幹イ段形に「タイ」の融合形「テー」

が後続する。カキテー (kak·i-teR)、ミテー (mi-teR)、キテー (k·i-teR)、シテー (s·i-teR)。融合形よりも劣勢だが、非融合形の「タイ」が後続する形もある。希望形は、断定非過去形「〜テー」、断定過去形「タカッタ」、推量形「タカンベー」、中止形「タクテ」、仮定形「タケレバ」と形容詞のように活用する。

・ナンカ クイテーナー ナーnten ユート
(何か食いたいななんていうと) (方言2)

〈のだ形〉

連体非過去形に「ノダ」の「ノ」が撥音化した「ンダ」が後続するカクンダ (kak·u=N=da)、ミルンダ (mi-ru=N=da)、クルンダ (k·u-ru=N=da)、スルンダ (s·u-ru=N=da)・シルンダ (s·i-ru=N=da) がある。語幹末の子音が r の多段型動詞と一段型動詞と「来る」「する」に「ンダ」が後続する形では、「ルン」が合一化して「ン」となり、トンダ (取ンダ, toN=da)、ミンダ (mi-N=da)、クンダ (k·u-N=da)、スンダ (s·u-N=da)・シンダ (s·i-N=da) という形になる。

より方言的な性質を持った形として、カク=ダ (kak-u=da) のように断定非過去形に「ダ」が後続する形もある。その際、語幹末子音が r の多段型動詞の末尾拍「ル」はトンダ (取ンダ, toN=da) のように撥音化し、また一段型動詞と「来る」「する」は末尾拍の「ル」が撥音化してミンダ (mi-N=da)、クンダ (k·u-N=da)、スンダ (s·u-N=da)・シンダ (s·i-N=da) となる。したがってこの場合、見かけ上は、断定非過去形に「ンダ」が後続した形と同形となり、区別がつかない。この形をとる際、多く「カクダヨー」のように「ダ」が長音化して終助詞「ヨ」が後続または、「カクダヨー」のように「ダ」に長音化した「ヨ」が後続する。

また、連体非過去形に「ノ」が後続する形も用いられる。カクノ (kak·u-no)、ミルノ (mi-ru-no)・ミンノ (mi-N-no)、クルノ (k·u-ru-no)・クンノ (k·u-N-no)、スルノ (s·u-ru-no)、スンノ (s·u-N-no)。県内地域によっては女性に主に用いられる地点もあるが、当該地点では性差は見られない。

・シュルイガ アングダヨ (種類があるんだよ) (方言1)

・ヨコハマノ ホーエ ヤルダッテ ユート
(横浜の方へ行くのだという) (方言2)

・クルマデ ミナ キタダ。(自動車で皆来たん

だ。) (方言 2)

- ・ダカラ ミズワ ショッチュー アンノ (だから水はいつもあるんですよ) (方言 1)

2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

大和市方言の形容詞の活用型は1つである。

〈断定非過去形〉

語幹に「イ」が続く形(アカイ(aka-i)など)もあるが、語幹末の母音と「イ」が融合した形の方がよく使われる。ア段に「イ」が続く「赤い」はアケー(akeR)、オ段に「イ」が続く「黒い」はクレー(kureR)、ウ段に「イ」が続く「寒い」はサミー(samiR)。ウ段の場合「薄い」のウセー(useR)のように融合した母音がエ段になることもある。語幹で母音が連続する「多い」、「遠い」は非融合のオーイ(oR-i)、トーイ(toR-i)もあるが、それぞれオエー(oeR)、トエー(toeR)と融合する。またはオーイー(oRi-i)、トイー(toRi-i)と語末に長音が付く。「濃い」は語幹に「イ」が続くコイ(ko-i)もしくは語末が長音のコイー(koi-R)もしくはコエー(koeR)となる。「良い」はイー(i-R)。

- ・イヤ オーイーヨ (いや多いよ) (方言 1)

〈断定過去形〉

語幹に「カッタ」(kaQ-ta)が後続する。アカカッタ(aka-kaQ-ta)。クロカッタ(kuro-kaQ-ta)。「良い」はヨカッタ(jo-kaQ-ta)、「濃い」はコカッタ(ko-kaQ-ta)もしくは断定非過去形に「カッタ」が続くコイカッタ(ko-i-kaQ-ta)が使われる。

- ・ソレ イチバン ツラカッタナー (それが1番辛かったですね) (方言 1)
- ・ガッコーガ トーカッタ。(学校が遠かった) (方言 2)

〈推量形〉

共通語と同じ断定非過去形に「ダロー」が後続する形がある。アケーダロー(akeR=daroR)。「ベー」が後続する形として①語幹に「カンベー」が後続する形がある。アカカンベー(aka-kaNbeR)。頻繁には用いられず、ヨカンベー(jo-kaNbeR)、ナカンベー(na-kaNbeR)や、ショーガナカンベー(仕方がないだろう、sjoRgana-kaNbeR)など、決まった表現で使われることが多い。続いて、断定非過去形に②「ダ

ンベー」③「ベー」が後続する形がある。アカイダンベー(aka-i=daNbeR)・アケーダンベー(akeR=daNbeR)、アカイベー(aka-i=beR)・アケーベー(akeR=beR)。過去の推量を表す場合は、断定過去形に「ンベー」が後続する。アカカッタンベー(aka-kaQ-ta=NbeR)。以上の「カンベー」、「ダンベー」、「ベー」の末尾の長音は義務的ではない。さらに、いずれの形も動詞と同様上昇イントネーションを伴った確認要求の用法がある。このほかに、動詞と同様、アケンジャンエーカ(akeR=NzjaneRka)のように断定非過去形に「ンジャンエーカ」もしくは「ンジャンエーノ」が後続する形式がある。この場合、イントネーションは他の形式と逆で、推量用法が上昇調、確認要求用法が下降調である。また、動詞と同様に確認要求の用法がある形式として断定非過去形、断定過去形に「ジャン(カ)」が後続する形式がある。また、「ン」を伴った「ンジャン(カ)」が確信の度合いの低い推量形の意味で用いられる。その際は上昇イントネーションで発音される。

- ・イッカイカ チョット アッタグレーデ ヨカンベトカ ナントカ。(一回かちょっと会ったぐらいでいいだろうとかなんとか。) (方言 2)
- ・ジューガツノスエジャ ナカッタンベナ (10月の末ではなかったんだろうな) (方言 1)
- ・ヨク シラネーケンド タケンジャンカ (よく知らないが、高いのだろう) (作例)
〈連体非過去形〉
連体非過去形は、断定非過去形と同形である。
- ・カワイタトコ ホトンド ネー クライ ヌレチマウノ(乾いたところがほとんどないくらいに濡れてしまうのです) (方言 1)
- ・ソレモ カリイー ムギナラ イーンダ。(それも刈りやすい(刈りよい)麦なら良いんだ) (方言 1)
- ・オモテー ワケダヨ(重たいわけだよ) (方言 1)

〈連体過去形〉

連体過去形は、断定過去形と同形である。

- ・ニセンボンモ ナカッタ クライダローナー(2000本もなかったくらいだろうな)

〈中止形〉

語幹に「クテ」または促音を伴った「クッテ」が後続する。アカクテ (aka-ku-te)、アカクッテ (aka-kuQ-te)。

- ・サブクッテ カワイタトコ ネーヨーニ (寒くて乾いた部分が無いように) (方言1)
- ・アレワ アツクッテヨー (あれ(半切り)は、暑くってねえ。) (方言1)

〈假定形〉

語幹に「キャ」もしくは「ケリヤ」が後続する。アカキャ (aka-kja)、アカケリヤ (aka-kerja)。共通語的な形として、語幹に「ケレバ」が後続する形も使われる。アカケレバ (aka-kere-ba)。

- ・ミズガ ナキャ トレナインダカラ ナエワ (水が無ければ採れないんだから。苗は。) (方言1)

〈否定形〉

語幹に「ク」を付し、「ネー」が後続する。「ネー」は「ない」の融合形である。アカクネー (aka-ku=neR)。形容詞に準じた活用をする。また、「ク」の後に取り立て助詞「ワ」が来る場合は「クワ」が融合して「カ」となる。アカカネー (aka-ka=neR)。

- ・ドーシテモ ハツガガ ヨクネーндаヨネ (どうしても発芽が良くないんだよね) (方言2)

〈なる形〉

語幹に「ク」を付し、動詞「ナル」が後続する。アカクナル (aka-ku=naru)

- ・クワモ ダンダン オーキクナルトユー コトデ (桑もだんだん大きくなるということで) (方言1)
- ・シメツポク ヒドクナツチャーンデ (湿っぽくひどくなってしまうので) (方言2)

〈丁寧形〉

改まった・かしこまった場面で使用されるが、日常の会話では好まれない。形式としては、断定非過去形の非融合形に「デス」が後続する。アカイデス (aka-i=desu)。多く、助詞「ヨ」を伴う。「デス」は断定過去形、否定形にも付く。否定形に付く場合はアカクナイデス (aka-ku=nai=desu) のように非融合形に「デス」が続く。

- ・ミンナ チーサイデスヨ エー (みんな小さいですよ。ええ。) (方言1)

- ・ソリヤー ナイデスヨ。(方言1)

〈のだ形〉

断定非過去形に「ダ」が後続する。多くの場合、終助詞「ヨー」が続く。アケーダヨー (akeR=da=joR)。もしくは、連体非過去形に「ンダ」が後続する。アケンダヨ (akeR=N=da=jo)。

- ・オレガ ワリーンダ。(おれが悪いんだ。) (方言1)
- ・シューリョーガ デッケンデス (収量が大きいんです) (方言1)

【形容名詞述語・名詞述語】

形容名詞述語と名詞述語は共通する点が多い。

〈断定非過去形〉

形容名詞、名詞ともに「ダ」が後続する。シズカダ (sizuka=da)、ガクセーダ (gakuseR=da)。

- ・ホレホレ ヤマジユバンダ (ほれほれ、山裾だ。) (方言1)
- ・コレワ マー ジョーシキダーネ (これはまあ常識だね) (方言1)

〈断定過去形〉

形容名詞、名詞に「ダッタ」(daQ-ta) が後続する。シズカダッタ (sizuka=daQ-ta)、ガクセーダッタ (gakuseR=daQ-ta)。

- ・サンショーグライダッタンカナ。(3升ぐらいだったのかな) (方言2)
- ・ミンナ キモノノ サンジャクダッタネ (みんな着物の三尺だったね) (方言2)

〈推量形〉

普段の場面では、形容名詞、名詞に「ダンベー」もしくは「ダベー」が後続する形が用いられる。シズカダンベー (sizuka=daN=beR)、ガクセーダンベー (gakuseR=daN=beR)、シズカダベー (sizuka=da=beR)、ガクセーダベー (gakuseR=da=beR)。そして、共通語的な「ダロー」が後続する形がある。シズカダロー (sizuka=daroR)、ガクセーダロー (gakuseR=daroR)。「ダンベー」「ダベー」「ダロー」の末尾の長音は義務的ではない。いずれの形も動詞と同様上昇イントネーションを伴った確認要求の用法がある。このほかに、動詞・形容詞と同じように、「ンジャネーカ」が後接する形があ

る。形容名詞・名詞の後に「ナ」を付し「ンジャーネーカ」を接続する。「ンジャーネーカ」のように、ジャが長音を伴う場合もある。シズカナンジャーネーカ (sizuka=na=NzjaneRka)、ガクセーナンジャーネーカ (gakuseR=na=NzjaneRka)。末尾は「ンジャーネーノ」のように「ノ」が来ることもある。形容名詞・名詞の後に直接「ジャーネーカ」を接続する形もある。シズカジャーネーカ (sizuka=zjaneRka)、ガクセージャーネーカ (gakuseR=zjaneRka)。いずれも、動詞・形容詞と同じく、イントネーションは他の形式と逆で、推量用法が上昇調、確認要求用法が下降調である。「ジャン(カ)」もほぼ同様の意味で用いられる。推量用法は確信の度合いが非常に低い。

- ・オークテ ロクタンダンベ (多くて6反でしょうね) (方言1)
- ・(10月の)ナカゴロダンベヨ。(中頃だろうよ) (方言1)
- ・イマデモ センブーキ アレダベ (今でも扇風機あれでしょう) (方言1)
- ・ソーユー アレジャーネーノカナッテ (そういうあれではないかなど) (方言1)
- ・ニガツノ ナカゴロジャンカ (2月の中頃だろう) (作例)

〈連体非過去形〉

形容名詞と名詞とで形が異なる。形容名詞は「ナ」が後続する。名詞は「ノ」が後続する。シズカナ (sizuka=na)、ガクセーノ (gakuseR=no)。

- ・ジョーズナ ヒトワ マッスグ オワルンダケレド ヘタナ ヒトワ アチコチ。(上手な人はまっすぐ(田植えが)終わるんだけど、下手な人はあちこちに曲がる) (方言1)
- ・サイゴノ モクヒョーニ ナッテル ワケダケレドモネ (最後の目標になってる訳だけれどもね。) (方言1)

〈連体過去形〉

断定過去形と同形である。

- ・ヘータイダッタ ヒトガ イテ (兵隊だった人がいて) (OM2)

〈仮定形〉

形容名詞、名詞ともに「ナラ」が後続する形と、「ダッタラ」が後続する形がある。シズカナラ (sizuka=nara)、ガクセーナラ (gakuseR=nara)、シズ

カダッタラ (sizuka=daQtara)、ガクセーダッタラ (gakuseR=daQtara)。

- ・センセーナラ カケンベ (先生なら書けるでしょう) (OM2)

〈中止形〉

形容名詞、名詞に「デ」が後続する。シズカ=デ (sizuka=de)、ガクセー=デ (gakuseR=de)。

- ・オンナト オトコト マジリデ (女と男と混じって) (方言1)
- ・オー アレ イッカイデ。(おう、あれ (=六分樽) 1回で。) (方言1)

〈否定形〉

形容名詞、名詞に「ジャーネー」もしくは長音を伴った「ジャーネー」、または非融合の「ジャーナイ」が後接する。シズカ=ジャーネー (sizuka=zja=neR)、ガクセー=ジャーネー (gakuseR=zja=neR)。語末の「ネー」は形容詞に準じた活用をする。また、「デナイ」という形もあり、「ワ」や「モ」をともなって「デワネー」、「デモネー」という形になる。

- ・コノクモ フツージャナイナンテユーホドスゴカッタデスヨ。(この雲普通じゃないなというほどすごかったです。) (方言2)
- ・イマゴロノヨーニ ジカン セーカクデナイカラネ (今頃のように時間は正確でないからね。) (方言1)

〈なる形〉

形容名詞、名詞に「ニ」が後続し、さらに「ナル」が続く。撥音化して「ンナル」となる形もあり、頻繁に用いられる。また、まれに「ニ」が脱落して直接「ナル」が続く形をとることもある。シズカ=ニ=ナル (sizuka=ni=naru)、ガクセー=ニ=ナル (gakuseR=ni=naru)。

- ・ユーガタツカラ モー ウスグモリニナッテネ (夕方からも薄曇りになってね) (方言2)
- ・ソレモ マー アトシナッテノ カンジカモシンナイ。(それもまあ後になってからの感じかもしれない。) (方言2)
- ・コッチモ オーゼーナッチャッテネ (こっちも大勢になっちゃってね) (方言2)

〈丁寧形〉

動詞、形容詞と同様改まった・かしこまった場面

で使用されるが、日常の会話では好まれない。形式としては、形容名詞、名詞に「デス」が後続する。シズカ=デス (sizuka=desu)、ガクセー=デス (gakuseR=desu)。「デス」は活用する。例えば断定過去形は「デシタ」、中止形は「デシテ」、推量形は「デショー」。形容名詞と名詞の否定形に丁寧形の「デス」がつくとシズカ=ジャ=ナイ=デス (sizuka=zja=nai=desu) と否定形の「ネー」が非融合形の「ナイ」に変わる。

- ・テンキノ イー ヒワ ヨースルニ ムギワラボーシカナンカデスネ (天気の良い日は要するに麦わら帽子かなにかですネ) (方言1)
- ・ヤッカイダッタ ワケデスヨ (厄介だった訳ですよ) (方言1)

〈のだ形〉

形容名詞、名詞に「ナンダ」が後続する。多くの場合さらに「ヨ」が続く。シズカ=ナ=ン=ダ-ヨ (sizuka=na=N=da=jo)、ガクセー=ナ=ン=ダ-ヨ (gakuseR=na=N=da=jo)。

- ・ウエイー ジョータイニ スルノガ オトコノ シゴトナンダ (植えやすい状態にするのが男の仕事なのだ) (方言1)

用例出典

方言1：大和市教育委員会編(1992)『神奈川県大和市の方言』大和市文化財調査報告書 53
大和市教育委員会

方言2：大和市教育委員会編(1993a)『神奈川県大和市の方言2』大和市文化財調査報告書 55
大和市教育委員会

OM1：1933年生まれの男性話者

OM2：1944年生まれの男性話者

作例：執筆担当者による作例(1984年生まれ神奈川県小田原市で生育)

参考文献

坂本薫(2021)「大和市方言のアクセント(1) -下鶴間・下和田-」『大和市史研究』第42号 大和市

善理信昭(1996)「寒川町と大和市との方言の差異について」『日本語研究諸領域の視点』上巻 平山輝男博士米寿記念会編 明治書院

日野資純(1952)「相模方言の素描(その方言区画)」

『国語学』第9輯

日野資純(1984)「神奈川県方言」『講座方言学5 関東地方の方言』飯豊毅一ほか編 第2版 国書刊行会

日野資純(1992)「神奈川県方言」平山輝男ほか編『現代日本語方言大辞典』第1巻 明治書院

(坂本 薫)